

〈論 文〉

メキシコのグアダルーペ聖母信仰の軍事史的意味 — 軍事目的に利用された聖母に関する一考察 —

古 畑 正 富

要 旨

This paper discusses a significance in military history of the Mexican belief in Our Lady of Guadalupe in order to give an analysis of the Holy Mother who was used for the military purpose.

Within the large amount of research which has been done to date on the Mexican War of Independence (1810 – 1821), especially in its first half (1810 – 1815), it is well known that the army of Miguel Hidalgo (1753 – 1811), triumphantly put up the military flag depicting the figure of Our Lady of Guadalupe. More importantly, we see that José María Morelos (1765 – 1815), the successor of Hidalgo, turned her presence into the driving force of the Mexican War of Independence by means of the political platform called “Self-Consciousness of Nation” (1813). It is remarkable here that both persons were just the priests of the Catholic Church. For example, Simón Bolívar reported the religious impact on the Mexican War of Independence in the “Letter from Jamaica” (1815).

However, Our Lady of Guadalupe as the patron of Mexico was not firstly created by Hidalgo and Morelos. Carefully examining her image and tradition based on the story of Juan Diego (1531), it becomes clear that four Creole churchmen, in the 17th century, tried to explain her appearance in theological terms, namely Roman Catholic Mariology. Our Lady of Guadalupe, therefore, was not then grasped in the hand of social lower class including mestizo, but upper Creole class.

By the way, we get a strong impression that these circumstances showed drastic change in the first half of the Mexican War of Independence. The heroic victories by Hidalgo and Morelos rapidly brought about the social militarization in Mexico. At the same time, social lower class including mestizo, began to play a prominent role, and the Mexican belief in Our Lady of Guadalupe also shifted to the phase of folk Catholicism, relatively different from the official doctrine of the Catholic Church. Indeed, Hidalgo and Morelos were finally executed by the colonial authorities of Nueva España. Yet, we think, it is no exaggeration to say that their tragic lives can be regarded as the prophecy of the Mexican Revolution, which led to the spread of nationalism.

キーワード：グアダルーペ聖母, メキシコ独立戦争, 軍事史, フォーク・カトリシズム,
ミゲル・イダルゴ, ホセ・マリア・モレーロス

1. はじめに

イタリアのフィレンツェに「サンタ・マリア・デル・フィオーレ（花の聖母寺）」というカトリック教会が建っている。それは、優しく円やかな響きをもつ美しい名前であり、聖母マリアの一般的なイメージを浮かび上がらせている。だが、17世紀半ば（1650年）の長崎を舞台に繰り広げられた、山田風太郎『外道忍法帖』の女主人公「マリア天姫」の凄絶な戦闘的振舞いが示すとおり、ことによると、母性の深淵は華麗な絵巻でなく、カステイーリヤの薔薇に似て剣呑な存在だったかもしれない¹⁾。実際のところ、こうした伝奇的な混沌といえる姿が、メキシコのグアダルーベ聖母信仰から臍に感じられることを、我々はたえず念頭に置く必要がある。

ホメロス『イーリアス』で描出された、海の女神テティスと血塗られた英雄アキレウスのように、戦争における母子の結合の事例は枚挙にいとまがない。グアダルーベ聖母も同じく、ヌエバ・エスパーニャ、ひいてはメキシコの分岐点にしばしば現われ、その都度、兵士の軍事行動を支える精神的な拠り所として働いた²⁾。1910年に勃発したメキシコ革命のとき、エミリアーノ・サパタ率いる農民軍はグアダルーベ聖母の軍旗を風になびかせて進撃したが、苛烈な戦場に立つサパタの原風景が百年前のメキシコ独立戦争（1810-1821年）、なかんずく前半（1810-1815年）の波瀾と憂いに満ちた展開へ戻ってゆくことは間違いない³⁾。

本稿の目的は、このメキシコ独立戦争前半を俎上に載せつつ、メキシコのグアダルーベ聖母信仰の軍事史的意味を問直し、軍事目的に利用された聖母に関して考察することである。その際、庶民信仰に根ざす、フォーク・カトリシズムの性格が充分検討されなければならない。メキシコ史家の国本伊代は言う。「キリストと聖母グアダルーベを敬愛し、カトリック信仰に根づいた伝統文化を強く保有しながら、メキシコ人はローマ教皇庁が世界のカトリック信者に伝授する公式教義を必ずしも忠実に守っていない。…しかし同時に、メキシコ社会に根づいているカトリックの伝統文化は、メキシコ人の心の中に超人的な神の存在を認めて、それを崇拜する心理と他人を思いやる優しさを植え付けている」⁴⁾。

むろん、人間の歴史的経験に照らしてみれば、植え付けられた優しさと微笑の裏に渦巻く、暗い想念を無視することはきわめて困難である⁵⁾。それは、陽光に輝く大地を髣髴させる、褐色の肌に包まれたグアダルーベ聖母についても変わらない。仮にグアダルーベ聖母の在り方がそれに関与した人々を通して規定されるなら、「戦場を駆けめぐる女」の肖像を聖母へ投影することで、鞭打つスペイン人に対する隠忍ないし臥薪嘗胆の気持を、彼らがぶつけたとしても不思議ではないのだ⁶⁾。本稿は比較文化史のアプローチにより、そんな二重動作の心性を、「グアダルーベ聖母信仰とメキシコ独立戦争前半の背景」（第2節）、「軍事史における『産む母』と『戦う兵士』の関係性」（第3節）において論及し、最終的には「社会の軍事化を導く宗教と祖国」という命題へ踏みこんでみたい（第4節）⁷⁾。

2. グアダルーベ聖母信仰とメキシコ独立戦争前半の背景

日本人がはじめて聖母マリアに接触したのは、スペインの「黄金世紀（Siglo de Oro）」、すなわち16世紀に遡る出来事であった。この偶然の出会いには貧しい百姓信徒に大きな感銘を与え、禁教令と弾圧政策が徹底し、血風吹きすさぶ17世紀の動乱期において、九州の大地へ悲哀の種が蒔

かれる誘因と化した。たとえば、島原の乱（1637-1638年）の後日談として、遠藤周作『沈黙』（1643年の「梶目大島事件」と想定）⁸⁾は「聖母子の踏絵」について物語り、当時の信徒がキリストよりも、むしろ虐げられた聖母マリアのほうに心を砕きつつ殉教した様子を伝えるけれど、そこには、上辺の理屈を越えた〈母なるもの〉への叫びが生々しく聞こえるようだ⁹⁾。したがって、ある種のアナロジーを踏絵に当てはめれば、我々はまず、落ちた旗印を眼前に想起すべきだろう。なぜなら、北方謙三に貫流する“革命戦記”の作品世界から言葉を借りると、「大義があればこそ、一敗地にまみれようとも、再び旗を掲げることができる」からである¹⁰⁾。

さて、メキシコ独立戦争の劈頭を飾る「ドロレスの叫び（1810年9月16日）」に際し、武装蜂起の指導者ミゲル・イダルゴ（1753-1811年）配下の兵士たちは「聖母万歳！」と高らかに声をそろえ、騎虎の勢いのまま、グアダルーベ聖母の軍旗がはためいたことは、よく知られている。戦場の守護神として聖母を旗印とする仕方は、彼の後継者ホセ・マリア・モレーロス（1765-1815年）の綱領「国民の自覚」にも認められ、メキシコ独立戦争前半にみる宗教的神秘主義の淵源になったと考えられる¹¹⁾。大垣貴志郎は、次のように説明する。「メキシコ独立戦争の特徴について、シモン・ボリーバルも1815年に著した『ジャマイカからの手紙』の中で、指導者の政治と宗教を混同する独特の考え方と巧妙な策略を見抜いていた。ボリーバルはモンテスキューやプルタルコス著作を読んでいた共和主義者である。『メキシコ独立戦争の闘士は、国民の信仰の対象、グアダルーベ聖母をすべての難問解決の拠り所として、その祈願実現の旗頭としていた。これで、政治的課題と熱狂を悉く宗教的要素と交差させて、独立の自由を勝ち取ることに至った。メキシコで聖母に対する敬愛は我々の想像を越えるものがあり、いかなる預言者の威光も凌ぐものがあつた』。イダルゴは聖母像を軍旗に利用した。事実、人々を引き付けた。モレーロスはその点、聖母を独立戦争の中心的存在にまつりあげている」¹²⁾。

以上の発言を吟味すると、ボリーバルがあえて「独立」の達成でなく、前提たる「独立の自由（freedom of independence）」を勝ち取ることに言及し、ことさら独立精神の醸成を称揚したのは示唆に富む¹³⁾。日本史の「一揆」という用語はもともと、「揆を一にする」ということから団結を意味するが、たとえ武装集団が発生しても、居流れる群衆が存在し、時に突拍子もなく右往左往するだけでは革命と直接結びつかない¹⁴⁾。佐藤賢一が指摘するとおり、そんなありさまでは、踏み出した武装蜂起の大半が騒擾、暴動、反乱として処分される。—それを革命に昇華させるためにはもう一段の仕掛けも不可欠となり、思想の役割が決定的になってくる¹⁵⁾。つまるところ、革命というものが一つの運動である以上、参与する群衆をより秩序だった勢力に変化させるべく、彼らのなかへ有無をいわさぬ一石が投じられ、同心円状に次々と波紋を広げなければならない。表1に照らしてみると、メキシコでは現在に至るまで、家族に対する信頼が軍事の心性を支える必須の要素だったことがわかる。およそ、これは市井の日本人にも共通するパターンであり、過去の経験から判断すれば、戦争における十全な大義として人々を鼓舞するに足る魅力を備えていたと考えられる。

表1 メキシコ人が信頼する対象ランキング¹⁶⁾

順位	対象	%
1.	両親	79.8
2.	イエス・キリスト	72.2
3.	聖母グアダルーペ	60.0
4.	両親以外の家族	40.6
5.	聖職者	24.2
6.	友人	21.2
7.	教師	14.4
8.	新聞記者	2.5
9.	警官	2.2
10.	政治家	0.7

もちろん、表1の表示板には、いくつかの考えるヒントが埋められている。1位～3位は両親－イエス・キリスト－グアダルーペ聖母と連なり、とりわけ家族のイメージがメキシコ人によって固着され、彼らの脳裏から離れない様子を知ることができる¹⁷⁾。4位は、核家族→拡大家族への移行を象徴しているが、メキシコ人にとって、社会構造の基礎であるところの核家族のほうに重きが置かれたことは疑いない¹⁸⁾。

主として、マリア神学（Roman Catholic Mariology）を特徴づける要素は、①無原罪の御宿り②聖母被昇天③共贖者マリア④仲介者マリアの四項目といわれるが、メキシコ独立戦争当時におけるグアダルーペ聖母の本質を見極めるためには、何よりも仲介者マリアという観点に想到することが大事である。聖母マリア崇拜は12世紀以降にヨーロッパで広がりはじめたが、近世で新しく浮き彫りにされる概念は、聖家族の繁栄と母性の勝利であり、仲介者マリアの効験を中心に聖母の本質が解釈された結果、戦争における母子の結合が改めて強調されるという波及効果を生じたからである¹⁹⁾。それゆえ、古代から点々と続く戦場の風景が人間心理に忍び入り、やがて「新しい皮袋に古い酒を盛る」かのような様相を呈したことを、我々は忘れるべきではない。イダルゴ配下の兵士たちが復讐を誓い、グアダルーペ聖母を軍旗に選んだ事実は、彼らの信仰が現世利益の色彩を濃厚に帯びていたことを示す。換言すれば、生死のはざまを歩む戦場では、生き残りを賭けて勝利が渴望され、集結した群衆の不安を一掃すべく、「勝利の女神」の加護がひたすら期待された。それは、勝利の女神ウィクトーリアの像が描かれた、古代ローマの軍旗ウェクシルムを彷彿させる情景であったろう²⁰⁾。

メキシコ人にとって、5位という聖職者の立場は微妙である。国本伊代によれば、教会の政治への介入に対し、メキシコ人の多数が厳しい視線を注いでおり、教会と聖職者は他の組織より信頼度が高いものの、突出した信頼関係を国民との間に築いているとは言いがたい²¹⁾。その一方、新聞記者、警官を含む官吏、ましてや政治家といった中間～上層エリートへの圧倒的な不信感と比較して、聖職者に対する信頼度ははるかに高く、（聖職意識がどんどん希薄になった）教師を上回り、家族に次ぐ地歩を固めている。この問題に関して、聖職者と6位の友人がほとんど同列に並んだことは注目に値する。一概に聖職者といっても歴史的には、個人として信者間で苦悩する下級聖職者（平民出身）と、組織の論理に支配される高位聖職者（貴族出身）が混在し、身分の上下のなかで両者の確執と相剋はめざましかったからである²²⁾。メキシコをスペインから独立

させようとしたイダルゴはクリオーリョ階級に属していたが、異端者として疎外された司祭であり、モレーロスはメスティーツ出身の司祭にすぎなかった。先住民や下層階級と意気投合した友人であることを標榜し、彼らを軍事的な支持基盤としたイダルゴやモレーロスからすれば、メキシコ独立戦争前半はまさしく下剋上の場に転じた²³⁾。それは同時に、クリオーリョに押さえられたグアダルーベ聖母信仰を大空へ飛翔させ、はからずも幅広い民衆に伝播させてゆく離脱と流転の運命を担ったのではないか。現代メキシコ社会で聖職者についての否定肯定の見方が交錯するのは、歴史の荒波に揉まれたメキシコ人の内なる皮肉をとみに反映したものと推察される。

それでは次に、グアダルーベ聖母顕現譚の複合的な成立過程を整理したい。この作業によって、クリオーリョ聖職者たちの努力で発明されたグアダルーベ聖母信仰が、痛し痒しというか、メキシコ独立戦争前半で彼らの思惑から外れ、後にフォーク・カトリズムとしてカトリック教会とも一線を画すようになる混沌を抱えていた様子を眺めることができる。混沌は秩序の対概念であり、「二重構造 (duplex structures)」として流れ藻のように絡み合っている。宗教史的立場から、「宗教性」と「宗教」との隔たりは銘記されるべきだが、民衆の激しく揺れ動く感情において、「宗教性」のほうが「宗教」より大きな集合へ還帰する点は明らかであり、「宗教性」≡混沌、「宗教」≡秩序という風に近似対応させることも可能だろう²⁴⁾。それゆえ、革命指導者の蔵する混沌も、何かのはずみで「宗教性」→「宗教」という逆行心理へまろび出る場合も少なくなく、フランス革命前半において異様な精気に燦々と輝く、ジャコバン派の領袖にして思想的軍師たるマクシミリアン・ロベスピエール (1758-1794年) が革命の秩序化を意図し、1794年6月8日、シャン・ド・マルスの丘で「最高存在の祭典」を華々しく挙行了した事件は、その好例と考えられる²⁵⁾。

表2 グアダルーベ聖母顕現譚の複合的な成立過程²⁶⁾

第一段階 (原因)	16世紀後半の史料にはテペヤックの丘に建てられたグアダルーベ聖母像があり、インディオが信仰していたという記録は残されているが、スアレス・デ・ペアルタの不明確な記録を除けば、奇蹟を記した聖職者・歴史家・役人はいない。17世紀以降、度重なる洪水の被害に悩まされたメキシコ市を救う守護神 (1629年にテペヤックからメキシコ市へ聖母像が移送) として、また疫病の救済者として、民衆の間の存在感がひとしお大きくなった。これらの事件が、グアダルーベ聖母顕現の原因譚になったと考えられる。
第二段階 (結果)	「グアダルーベの四福音史家」(ミゲル・サンチェス、ラッソ・デ・ラ・ベガ、ルイス・ベセラ・タンコ、フランシスコ・デ・フロレンシア) と呼ばれるクリオーリョ聖職者たちが、ヨハネの黙示録の独自の解釈 (ミゲル・サンチェス) や実証的歴史学の援用などを通し、それまで漠然と信じられてきたグアダルーベ聖母顕現伝承を立証し、聖母信仰を正当化しようと試みた。そして、植民地教会も次第に彼らの聖母顕現説を受け入れ、グアダルーベ聖母はメキシコの守護神とみなされた。結果として、民間信仰が公式の信仰へ昇格したが、教会当局の目的は、ヌエバ・エスパーニャのクリオーリョ主義を鼓吹し、植民地エリートの間のカトリック信仰を強化することであった。

表2にみるとおり、やがて相対的に独立するとはいえ、メキシコに語り継がれるファン・デイエゴの物語 (1531年) は元来、スペイン起源の伝承を模したものであり、編集問題を丹念に調べれば、グアダルーベ聖母顕現譚の成立は先住民やメスティーツの唱道でなく、むしろクリオーリョ聖職者のキリスト教神学に依拠したことがわかる²⁷⁾。この場合、「グアダルーベの四福音史家」

が学問的根拠を付与した、1648年ないし1649年を一応の画期とすることは可能だろう²⁸⁾。そして、かかる成り行きが、戦乱に明け暮れた17世紀の、いわばバロック的な精神世界を背景に現われたことは重要である。

このように、歴史における17世紀の位置づけは、メキシコにおけるグアダルーペ聖母信仰を探るうえで黙過できない。エンリケ・クラウゼによれば、メキシコ独立戦争は当初、祖国観念の曖昧な「中世的要素を含んだ革命」として、あるいは後期中世～近世初期における「宗教的熱狂の残照をしたたかに浴びた起兵」として出発した²⁹⁾。結局、近世初期は前時代からの連続にほかならず、不規則で歪な形に嵌まりつつ、その遺風の圧力がひしひしと加わる中間期だった。ここで特筆すべきは、17世紀前半のドイツ三十年戦争（1618-1648年）である。この戦争の前夜、非効率な政治と日常生活への不満が蓄積し、現世利益による宗教の確かな保証を求めて、神秘主義的世界観が横行した社会動向を、C・ヴェロニカ・ウエッジウッドは見事に叙述する。「神学論争は、すべての階級の日常的な読み物となっており、説教は彼らの政策を指示し、道徳的冊子は彼らの余暇を紛らわしてくれるものであった。カトリックのあいだでは、聖人崇拜が、以前の諸世紀に見られないほどの高さに達し、大衆ばかりでなく、教育ある人々の経験のなかにおいてさえも、支配的地位を占めるにいたった。奇蹟譚が、再び毎日の生活に明るい希望をもたらした。物質世界の変化、古き伝統の崩壊、そして、死にかかっている信徒集会への不満足、それらが、男や女をして、霊的なもの、不可解なものへと走らせた。…」³⁰⁾。

こうして、ドイツ三十年戦争が宗教戦争として開幕したとき、乱世の時勢にも後押しされ、聖母マリアの軍旗は猪突猛進する諸侯とともに、戦塵の間を駆けめぐった。しかし、ネルトリンゲン会戦（1634年）のころから、スペイン兵は戦いの勝鬨を変えた。菊池良生は、この長期にわたった国際紛争を近代の序章と捉え、次のような瞠目すべき見解を述べる。「それまではカトリック普遍主義を表すように、スペイン兵の合い言葉は『サンタ・マリア！』であった。それが徐々に『スペイン万歳（ビバ・エスパーニャ）！』になってきた。スウェーデン軍、皇帝軍、フランス軍もそれぞれ『スウェーデン万歳！』、『ドイツ万歳！』、『フランス万歳！』と唱え始めてきた。後のナショナリズムがヨーロッパの大地に種蒔かれたのである。ヨーロッパはこの三十年戦争後に絶対主義時代に入り、やがてその折りに画定された支配領域（ウェストファリア・システム）をほぼそのまま国民国家、すなわち近代国家に移行させた。三十年戦争末期に種蒔かれたナショナリズムはその間、大きく成育し二十世紀を迎える。そして無数の匿名の人々が自分の個を越える一つの上位理念に進んで殉じることになる。ベネディクト・アンダーソンに従えば、『今世紀の大戦の異常さは、人々が類例のない規模で殺しあったということよりも、途方もない数の人々が自ら命を投げ出そうとしたということにある』というわけである³¹⁾。要するに、聖母マリアの戦闘モードは、国民国家の誕生に併せ、近代国家の国旗と祖国観念に繰り込まれてゆく。ただし、国民国家の土台に家族国家が鎮座する構造から「産む母」と「戦う兵士」の悲壮な二重奏が雲散霧消せず、わけても戦時下で国民統合のシンボルたる母性の物語（軍国の母）が炙り出された記憶は、太平洋戦争の嵐を巻き起こし、惨たる敗北を喫した日本人にとって今なお強烈である³²⁾。

17世紀にグアダルーペ聖母顕現譚が形成された後ですら、司祭セルバンド・テレサ・デ・ミエル（1763-1827年）の説教が耳目をそばだたせたように、その信仰は神秘主義の底知れぬ魅力を湛えつつ、ヌエバ・エスパーニャの民心に多大な宗教的影響を及ぼした³³⁾。やはりグアダルーペ聖母こそ、メキシコ独立戦争前半でクリオーリョ・エリートと下層階級をつなぐ触媒になったこ

とは否めない。時代区分を勘案すると、メキシコ独立戦争は当初、近世の段階にあったと感得することができるが、そこには近代の試練をへて、現在のメキシコ独立記念日で「メキシコ万歳（ビバ・メヒコ）！」と叫ぶに至る、遙かなる歴史の旅路が見え隠れしながら、大空を吹きどよもす風に煽られていた。

そんな脈絡に即し、英雄にして敗者という両義性をもつ人物³⁴⁾、イダルゴとモレーロスが自らを鞭撻し躍動したことは、まことに感慨にたえないのだ。旧約聖書の預言者には二つの表現形式、①初期預言者②記述預言者があるが³⁵⁾、①イダルゴ（クリオーリョ）②モレーロス（メスティーン）と置き換えてみると、おそらくポリーバルの言葉を咀嚼することも容易になるだろう。モレーロスはイダルゴの見果てぬ夢の継承者として、同じく処刑（1815年12月22日）の悲運に遭遇したけれど、イダルゴの独立闘争で「主役を担った」民衆に対して宗教的に訴えるという戦略は、モレーロスの手により、その神学的意義がはじめて確立された。—メキシコ革命史のなかで「先駆」というものの役割を正しく評価すれば、血で贖われる文字に相違ないが、モレーロスはそれを立派に記述したといえる。彼の挑戦によって、グアダルーペ聖母信仰は思想化され、メスティーンたるメキシコ民衆の心の奥へ溶け込んだ。そこでは、グアダルーペ聖母が見えざる民衆（invisible people）と渾然一体になり、メキシコ独特の国民国家とナショナリズムの発展も将来したのである³⁶⁾。

3. 軍事史における「産む母」と「戦う兵士」の関係性

第2節で扱った問題と深く関係するが、若桑みどりは、次のように概括する。「戦争行為は、不可欠の象徴として『母』を必要とする。第一に、この母性像は、戦争という『血』と『大量殺戮』の心理的補完物として不可欠であり、殺し殺される者としての兵士のイメージは、不可欠の補完物として産む者—母のイメージを要求した。だからこそ、母性のイメージは、死と破壊のイメージを補完したうえ、社会的な精神状態をも安定させるに至ったのである。第二に、母性のイメージは、民族統合の記号として不可欠だった。それは、戦争という暴力行為のもたらす心理的荒廃から国民を救い、すべての国民をその差異を越えて一つの『血』に結びつけ、国民国家、家族国家としての民心の統合に寄与したからである。戦時のマス・イメージが母性像へ集約されるのは、このような根源的理由に基づいている」³⁷⁾。事実、戦争廃止が至難の業とすれば、人間は可能な限り、その損害と悲惨の様相をヴェールで覆い隠し、「戦う兵士」が散らすむき出しの闘志を減殺させないように努めた。それがまた、戦争を正当化する補完性・補償型の軍事思想を必然的に生み落したゆえんでもある³⁸⁾。

まず古代オリエントにおいて、これに相当する軍事史の事例を挙げてみよう。戦争の機械（war machine）との異名を冠せられた、アッシリア人の伝統的な心性として、勝利の源泉を男性の荒ぶる力に求めたことは確かである。もっとも、アッシリア人の精神（マチスモ）のなかで、女性が紡ぎ出す戦場の幸運を冷たく嘲る姿勢が皆無だった点に、我々はぜひ注目しなければならない³⁹⁾。

表3 サムラマト（セミラミス）が登場するパザルチック碑文⁴⁰⁾

1	アッシリア王、アダド・ニラリ3世の境界石碑。
2	アダド・ニラリ3世は、アッシリア王、シャムシ・アダド5世の子であり、
3	サムラマト（セミラミス）の子である。サムラマトは女王（原義は「宮女」）——
4	彼女は、アッシリア王、シャムシ・アダド5世 [の横に並び]、
5	強き王、アッシリア王、アダド・ニラリ3世の母である。
6	サムラマトは、シャルマネセル三世の家の嫁である。
7a	シャルマネセル3世は、四つの方面（軍管区）を統べる王である。
7b	ウシュピルルメは、
8	クムフの（民の）王であり、アッシリア王、アダド・ニラリ3世と
9	女王であるサムラマトをして、
10	ユーフラテス渡河を行なわせた。

紀元前一千年紀の新アッシリア（Neo-Assyria）帝国において、アッシリアは被征服民族を自領に編入したため、広域の戦線で堅固な防衛体制を維持する必要があった。その結果、次第に属州統治が重要な位置を占め、中央宮廷に勢威を張る宦官と歩調を合わせて、地方を掌握する権臣の台頭が進んだ。アッシリア王、アダド・ニラリ3世（在位 紀元前810-783年）の時代、西方遠征の成功で版図を拡大した祖父シャルマネセル3世（在位 紀元前859-824年）の記憶は相変わらず残っていたが、父のシャムシ・アダド5世（在位 紀元前823-811年）の治世下では帝国弱体化の兆しが見えはじめていた⁴¹⁾。表3にみるとおり、緊迫する政治情勢を背景にして、統治初期の紀元前805年、アダド・ニラリ3世は摂政母サムラマトとともに、ユーフラテス渡河とアルパド遠征に踏み切るが、少年王の親征であったがゆえに、将軍ネルガル・イラヤが司令官（*tartānu*）として総指揮をとった。この場合、サムラマトが実戦に直接参加することはなかったが、麗しい女丈夫と敬愛され、全軍の忠誠心を集めていたと推定される⁴²⁾。

表3のパザルチック碑文に加えて、次の二点もクローズアップされる。①ADD 857 (= SAA 7, no.5) は、アッシリア宮廷の官職表である。ここには、正規軍（野戦部隊）として、王母（AMA. MAN）のキツル隊とその司令官サラムヌの名前が記されている（Obv. II 30）。キツル隊がどのような軍事単位だったかを速断することは難しいが、一部では騎兵との密接な関係も窺える⁴³⁾。②同じくADD 857には、王母のクルブートゥ（近衛兵）も複数言及され、他の史料と照合すると、王母のクルブートゥの存在が示唆される⁴⁴⁾。

軍事史において、こうした陣営の母（マーテル・カストゥロールム）という概念は決して特異でなく、古代ローマでも紀元195年、皇帝セプティミウス・セウェルス（在位 紀元193-211年）の妻ユリア・ドムナにこの称号が授与されたという⁴⁵⁾。また、セウェルスに関するエピソードには、ローマ皇帝と勝利の女神の分かちがたい関係を示すものがある。「セウェルスの死は、以下のような出来事で予示された。…見世物の開かれた日のこと。勝利の女神の石膏像がいつものようにしつらえられた。その像は手にシュロの枝を持っていた（シュロは、ローマの幸運の女神の原型たるギリシアの勝利の女神ニケの象徴である）。真ん中の像が、セウェルスの名を刻んだ球を持っていたが、一陣の風で（円形闘技場にある）貴賓席からまっすぐ立った形で下に落ちた。そして、地面にその姿勢で立ったのであった。…」⁴⁶⁾

勝利の女神の形象において、女性→母性への遷移は数多くの例証から観察することができる。

たとえば、旧約聖書の士師記4-5章には、女預言者デボラがバラクとともに立ち上がり、イスラエル部族連合⁴⁷⁾の旗頭として、カナンの王ヤビンやその將軍シセラと戦った記事が見られるが、とくに「デボラの歌」の一節は（士師記5章7節、新共同訳）は次のように記す。「村々は絶えた。イスラエルにこれらは絶えた。わたしデボラはついに立ち上がった。イスラエルの母なるわたしはついに立ち上がった」⁴⁸⁾。そしてまた、ローマ皇帝ネロ（在位 紀元54-68年）の治世下に対ローマ反乱（紀元60年）を起こした、ブリタンニアのイケニ族の女王ボウディッカは、母性のより鮮明なイメージを与えてくれる⁴⁹⁾。ローマ史家の南川高志によれば、この女傑の名前ボウディッカは、古代語で「勝利 (*bouda*)」を意味したため（ケルトの勝利の女神も「ボウダ」と呼ばれる）、時のイギリス女王ヴィクトリア（在位 1837-1901年）とのアナロジーで非常に重要視された一虐げられたブリテン島住民を率いてローマの世界支配に挑んだ勇猛果敢な女性は、その卓越した気概を通し、世界を導くイギリス女王に擬されたのである。そうしたナショナリズム的な世相のもとで、二人の娘を戦闘馬車に乗せたロンドン・ウェストミンスター橋脇のボウディッカ像が造られたが（1870年代に制作、1902年に設置）、他方1913-1915年に制作され、ウェールズ的首都カーディフ市の市庁舎に設置されたボウディッカ像は、ロンドンのそれと異なり、二人の娘を連れた慈愛に満ちた母の姿になっていた⁵⁰⁾。このようなデボラもしくはボウディッカの本質が、メキシコのグアダルーベ聖母に比肩することは明白である。

最後になるが、旧約聖書の詩編2編7節は言う。「主の定められたところに従ってわたしは述べよう。主はわたしに告げられた。お前はわたしの子、今日、わたしはお前を産んだ」⁵¹⁾。使徒言行録（使徒行伝）13章33節⁵²⁾で反復されるように、一見すると信仰告白の言葉と思いがちだが、その形成過程を精緻に辿ると、これが「アッカド語預言」文学の系譜に連なることがわかる⁵³⁾。それゆえ、詩編2編の文脈は死海写本の4Q246〈神の子〉文書と比較することができよう。なぜなら、両者は熾烈な戦いの形容に彩られ、a) 敵に対する勝利の約束；b) 王の戴冠 (*coronation*) のイメージという、二つの要素が共通しているからである⁵⁴⁾。さらに、詩編2編7節は神の出産表象を浮き彫りにし、その両義性をモチーフにしていることも理解される。ここにおいて、グアダルーベ聖母信仰にみるとおり、守護神〈父なるもの〉が地母神〈母なるもの〉に融合し、双方向の交流の構図、すなわち父性（支配）⇔母性（共苦）があらわになってくるのだ。かくして、「子」であるイエス自身が「母」とみなされることにより、真の神の力たり得るというキリスト教の新しい潮流は、修羅の巷に佇む人間の内奥の精神的救済を実現するために要求されたといえるだろう⁵⁵⁾。この現象が、軍事史における「産む母」と「戦う兵士」の関係性を探究するうえで肝要なことを、我々もやわらか忘れてはいられまい。

4. おわりに—社会の軍事化を導く宗教と祖国についての断章—

エルナン・コルテスによるアステカ征服（1519-1521年）を含めて、内戦の打ち続いたメキシコ史には混沌の時代⁵⁶⁾が散見されるが、「軍国の母」という一時の白々しさを掻い潜って、グアダルーベ聖母の物語は重畳たる山脈のごとく人々の間に横たわり、メキシコ人も「聖母の騎士／女騎士」としての自己を凝視しているかのようである⁵⁷⁾。それゆえ、本稿において明らかにしたいことは、こうした母性への思慕がしばしば軍事目的に利用されるという認識であり、現実問題として、グアダルーベ聖母信仰の軍事史的意味もそこに発見されなければならない。

17世紀、フアン・ディエゴの物語（1531年）からクリオーリョ聖職者たちがグアダルーペ聖母顕現譚を案出したように、グアダルーペ聖母信仰は元来、民衆の手に握られていなかった。その情勢が様変わりするのは、メキシコ独立戦争前半において、司祭のイダルゴやモレーロスがグアダルーペ聖母を戦場の前景に押し出し、軍隊の士気を著しく高揚させた時点だが、彼らの独立闘争はいまだ本格的な革命でなく、あくまでも革命の前史と位置づけることが妥当だろう⁵⁸⁾。この場合、守護神たるグアダルーペ聖母の効験（仲介者マリア）が大いに期待され、先住民や下層階級のメスティーソを中心とするメキシコ社会の軍事化が急速に進行したと考えられる⁵⁹⁾。ポリバルが著した『ジャマイカからの手紙』は、そんな状況を端的に表している。大垣貴志郎によれば、モレーロスは「宗教と祖国」という二つの緊張に直面していた⁶⁰⁾。つまり、メキシコにとって、国民国家の原風景に母性へ向かう宗教的傾斜があったことは否めない。それが、「産む母」と「戦う兵士」の関係性に結びつき、「宗教性」を革命思想に昇華させる道筋をもつったといえる。ただし、その「宗教性」は神秘主義の流れに棹さす庶民信仰であり、フォーク・カトリズムとして既存の宗教（カトリック）から相対的に独立しながら、対位法のなかでそこはかたなく哀愁の音色を奏でていた。

ところで、グアダルーペ聖母の軍旗を戦場のシンボルとする発想は、勝利の女神に対する祈願という観点から、人間精神にとって古い起源に遡るものであり、メキシコ独立戦争の原因（*casus belli*）と歴史的意義を追跡する際の里程標になるだろう。イダルゴとモレーロスはともに敗れて処刑されたけれど、彼らの目的が「古い皮袋に新しい酒を盛る」ことであったか、それとも、鏡面のように「新しい皮袋に古い酒を盛る」ことだったのか、また、どのような功罪がそこに存在したかが得心できるはずである。

*本稿は、2010年7月10日、天理大学アメリカス学会2010年度定例研究会における研究発表「軍事目的に供された聖母像についての簡潔な報告—社会軍事史に照らしてみた、メキシコのグアダルーペ聖母信仰における一側面」の内容を再考し、注を含めて大幅に加筆したものである。当該の発表要旨に基づいたEssayが『天理大学アメリカス学会ニューズレター』No.63（2010年10月）、8-9頁に掲載されている。なお、本稿で使用した、旧約聖書時代史ならびにアッシリア学に関係する略号は、*A/O*などに準拠している。

注

- 1) その意味で、山田風太郎の草する切支丹物の筆致は、信疑と愛憎がひしめき、矛盾した二つの心が明滅する人間世界へ滲透し異彩を放っている。関連認識として、会田、中村1989、196-198頁が提示する、ヒエロニムス・ボッス（1450?-1516年）の『快樂の園』に潜んだ内面の動機が含蓄に富む。
- 2) ポーランド人の愛国心や独立闘争を支える原動力であり続けた。17世紀ポーランドのヤスナ・グラ聖母、その他の「黒い聖母」信仰に関しては、内藤2000、249-288頁が解説する。
- 3) サパタの評伝に関しては、ウォーマック1970を参照。
- 4) 国本2009、314頁。これは、国本2009、289-314頁「補論 現代メキシコ社会とカトリック教会—1990年代のアンケート調査が描くメキシコ人と宗教—」のむすびである。ここで、国本は

- さまざまな統計資料を駆使し、説得的な議論を行なっている。聖母マリアとフォーク・カトリズム、そして文化変容 (acculturation) の進展に関しては、松原 2001, 117-170 頁「聖母マリアと三人のマリア」；国本 2009, 318 頁, 注 10 の説明が簡潔である。
- 5) ムージル 1978 は表面上、姦通小説であるが、そればかりでなく、愛における逆説の姿へ接近しようという鋭い狙いをも秘めている。その末尾の文章によると、完全なる合一、曇りなきアガペーでないため、かえって人間は単層の愛を越え、ふと神の臨在を察知するきっかけをつかむことがあるのだ。関連認識として、高村光太郎の詩集『智恵子抄』より、「夜の二人」と「山麓の二人」を参照。なお、フエンテス 1996 を貫くモチーフは、「スペインと新世界は、多元的文化が出会う中心地—排除でなく統合の地である」との信念だが、葛藤の彼方へ向けられた真剣な眼差しが、メキシコのメスティーソ文化と混血の心性を解く鍵概念になるはずである。そこでは奇妙に入り組んだ、ムージルの結び目の世界が垣間見えると思う。小松左京『ゴルディアスの結び目』他を参照。
 - 6) 阿部謹也は中世の研究のなかで、傭兵とともに戦場を駆けめぐった女の記録を紹介する。阿部 1993, 229-231 頁。社会史の枠組みに関しては、阿部 1985 から知見を得た。また、スペイン人に対する復讐の想いに関しては、ラス・カサスのみならず、バリャドリッド論争 (1550-1551 年) における王室史官セプールベダの論拠と彼の著述『アポロギア』などに目を配る必要があるだろう。ラス・カサス 1976；松森 2009 の他、セプールベダ 1992 を参照。
 - 7) 軍事史は、「広義の軍事史」と「狭義の軍事史」の二つに大別されるが、本稿では「社会の軍事化」という命題にもアプローチするため、「広義の軍事史」を拠り所としている。近年ドイツを含め欧米で見られるようになった「新しい軍事史 (the new military history)」としての「広義の軍事史」に関しては、阪口、丸島 2009 (書評：飯田 2010)；辻本 2010 を参照。西澤 1992 もその範疇に入るといっていい。
 - 8) 松方 2010, 36 頁他。
 - 9) とにかく踏絵は〈神的なもの〉へ向けられるがゆえに絶大な影響をもたらすが、単に踏むという外形に拘泥しているわけではない。この問題に関して、原始キリスト教史における初期カトリシズムの状況には興味深いものがある。荒井 2009, 221 頁によると、紀元 2 世紀初期のキリスト教徒迫害をめぐるローマ帝国側の原則は、皇帝トラヤヌス (在位 紀元 98-117 年) に宛てた小ブリニウスの書簡の一つ「クリストゥス信者」(紀元 111 年；プリニウス 1999, 421-425 頁) から看取することができる。しかしながら、小ブリニウスの書簡では、「クリストゥスを罵る」ことが棄教の条件になっており、聖母マリアが自律的に機能し得なかった点は無視できない。それゆえ、遠藤周作『沈黙』には〈神的なもの〉に対する認識の変化が印せられ、石田英一郎 2007 が説く土俗的な〈母なるもの〉への叫びがはっきり重ね合わされている。その汎神論的傾向が、彼の後期作品『深い河 (ディープ・リバー)』では一層顕著なことにも、注意を喚起したい。さらに、エリアーデ 1978, 134-174 頁「大地、女性、豊饒」を参照。
 - 10) 島原の乱で翻った陣中旗のごとく、神聖な軍旗によって大義を振り翳す軍勢は、武装蜂起を正当化しながら、自らの士気を高揚させやすい仮想空間を形づくっていた。神田 2005, 112-113 頁他を参照。
 - 11) 1813 年 9 月に発表された、モレーロスの綱領「国民の自覚」(23 条) のうち、第 19 条は「12 月 12 日をグアダルペ聖母の祝日と制定し、毎月の 12 日は敬虔な祈りを捧げる」と記す。クラウセ 2004, 80 頁。この綱領は、翌 1814 年に公布された「アパチンガン憲法」(242 条) の基礎になったものである。国本 2009, 36-37 頁を参照。
 - 12) 大垣 2001, 3 頁。19 世紀の代表的な自由主義者の一人、イグナシオ・マヌエル・アルタミラーノは「聖母は我々をメキシコと結びつける唯一の崇拝の対象で、それがなくなれば、メキシコの国の存在

- も消えうせてしまうかもしれない」と述べるが、彼の弟子フスト・シエラも同様の持論を披瀝している。クラウセ 2004, 83-84 頁; 古畑 2005b, 127-128 頁を参照。
- 13) ボリーバルの経歴に関しては、中川、松下、遅野井 1985, 33-35 頁以下を参照。ここには、民兵の結集と統率に長けた、軍事指導者としてのボリーバルの直観が冴え渡っている。
- 14) この問題に関しては、Katz 1988 が必読の書であろう。最大の転機といわれるモンテ・デ・ラス・クルセス（十字架の山）の戦いを含む、イダルゴの独立闘争の軌跡に関しては、クラウセ 2004, 47-68 頁; 大垣 2008, 78-81 頁を参照。先住民や下層階級のメスティーツから成るイダルゴ軍の凄まじい蛮性と殺伐さは、クリオーリヨ階級からの支持を失わせ、あたら膨大な兵員を擁しながらも、イダルゴ軍は兵站 (logistics) を確保できず、逆落しのように劇的な敗戦につながってゆく。その結果、1811 年 7 月 30 日、イダルゴは処刑された。この惨状に接して、ロレンソ・デ・サバラが「このおどけた指導者はグアダルルーベ聖母像を軍旗につけ、どんな政府を樹立すべきか示すことなく、町から町へ支持者と走り回った以外には何もしていない」（クラウセ 2004, 63 頁）と、さすらい歩く匪賊扱いの酷評に及んだのも当然である。アナロジーとして、ドイツ農民戦争 (1524-1525 年) に対するマルティン・ルターの否定的態度を取り上げることができる。松田 1969, 261-332 頁に所収された「農民戦争文書」を参照。
- 15) 佐藤 2010, 22 頁以下。佐藤は 23 頁において、もしも思想が関与せねば、革命という大事業に進みようがないと喝破する。1789 年に開始されるフランス革命の場合、その思想はいうまでもなく、モンテスキューや百科全書派、そしてジャン・ジャック・ルソーを頂点とする啓蒙主義であった。
- 16) 国本 2009, 303 頁 (表 8)。その出典は、*Este País*, no. 97 (1999 年 4 月), p. 32 の「複数回答」である。
- 17) 国本 2009, 303-304 頁は、「もっとも信頼する対象が両親であることは理解し得るとしても、2 位のイエス・キリストと 3 位のグアダルルーベ聖母が両親以外の対象と比較すると飛びぬけて高い数値を示していることは興味をそそる。何を根拠として信頼するに足るのか理解しにくい、漠然とした日常生活における不安をかき消してくれる祈りの対象として、受け入れられているのだろうか」との疑問を投げかける。ここでは慎重に結論が保留されているが、それは如実に現世利益の希求を体現しており、同時に庶民信仰における神秘主義の萌芽としても把握されよう。たとえば、宮本 2003 を参照。
- 18) 歴史を振り返れば、ヨーロッパの核家族は決して近代の所産でなく、すでに中世の入口たる、メロヴィング朝 (フランク王国) の段階でも芽生えていたと考えられる。ル・ジャン 2009, 121-131 頁を参照。
- 19) 池上 1992, 110-139 頁、とくに 130-139 頁「母性の勝利」。どの国でも、核家族化した家が、社会の基本細胞としての権利を主張し、同時に霊的な「母」概念が浮かび上がって、母を中心とする霊的家族/聖家族 (マリア・ヨセフ・イエスの三位一体) とそれに連続する聖なる親族 (マリア・ヨセフ・イエス+アンナ [ハンナ] の四位一体) の重要性が唱えられた。旧約聖書における預言者サムエルの母ハンナの祈り (サムエル記上 2 章 1-10 節) を原型とした、ルカ福音書 1 章 46-55 節の「マニフィカト (マリアの賛歌)」を参照。こうした傾向は、16-17 世紀から 19 世紀に至るまで見られる。そこでは、出産と家族の絆の表象によって、性のタブーの難問が巧みに解消されている一必死の戦闘のあげく、無惨にも処刑された孤獨な聖処女ジャンヌ・ダルクと異なり、生活空間における永遠回帰的な母性は、人間にとって普遍的な価値を保持した「約束の地」に等しいからである。ジャンヌ・ダルクに関しては、高山 2002 を参照。したがって、スペイン植民地時代の「凌辱 (chingada)」を堪え忍び、グアダルルーベ聖母に理想の女性像を追い求めたメキシコ民衆の切ない心情も、このようなマリア神学の推移のなかで解釈されなければならない。
- 20) 古代ローマの軍旗に関しては、ゴールズワーシー 2005, 133-134 頁を参照。実際、メキシコ独

立戦争前半で反乱鎮圧に赴いた副王領政府軍もグアダルベ聖母と対比して、レメディオス聖母に勝利を祈願し、正面の手強い敵へ威嚇の影をのばしたという。Hamill 1970 を参照。当時、モレーロスの部下フェリックス・フェルナンデス（後のメキシコ共和国第一代大統領）が感動のあまり、グアダルベ・ヴィクトリアに改名した逸話も、戦場の守護神としてのグアダルベ聖母に符合している。

- 21) 国本 2009, 314 頁。上掲の注 4 を参照。
- 22) 歴史小説という制限はつきまとうが、こうした人的関係については、佐藤 2008 がわかりやすく描写している (125-126 頁他, *passim*)。
- 23) 下剋上の時代に関しては、永原 1974 を参照。
- 24) 古畑 2008, 27 頁。「二重構造 (duplex structures)」に関しては、バルト 1971, 109-111 頁を参照。
- 25) 桑原 1975, 275-283 頁。これは、ロベスピエールの理念である「美徳の支配」の集大成だった。さらに、元首政期のローマ皇帝マルクス・アウレリウス（在位 紀元 161-180 年）が綴った『自省録 (*Ta eis heauton*)』(第 12 巻 14) を参照。ここでは、宇宙の秩序や神慮と並置しながら、指導者のない混乱による、どんな荒波にもさらわれない人間の英知の輝きを「自己自身へのもの」として見つめた、マルクス・アウレリウスの理性的な顔が印象的である。アウレリウス 1998, 270 頁を参照。
- 26) ドイツのアルト・ノート学派以来、旧約聖書学では広範な編集史研究が積み重ねられてきたが、最近の成果としては、長谷川 2010 が大いに役立つ。長谷川は「物語というものは著者／語り手と読者／聴衆の存在を前提条件としている。物語が前者から後者へのメッセージ伝達のための媒体であると仮定すれば、物語誕生の一大契機とそこに込められたメッセージとの間には密接な関係があると言える」(同論文 59 頁) と記すが、そうした方法論に依拠し、グアダルベ聖母顕現譚の歴史的信憑性も考慮されて然るべきだろう。表 2 のデータは、山崎 2004, 90-95 頁および 113-115 頁を整理したものだが、グアダルベ聖母像の歴史の変遷に関しては、Brading 2001 が優れた包括的研究書であり、本稿でも主として参考にした。聖母マリアと同一視された、ヨハネの黙示録 12 章で物語られる女 (the woman of the Apocalypse) に関しては、内藤 2000, 64-68 頁他を参照。
- 27) フアン・ディエゴ (Juan Diego) および彼の物語 (1531 年) は、Brading 2001 の随所に言及される。片倉 2009, 101-102 頁によると、サンタ・ムエルテ (Santa muerte) は「聖なる死 (神)」という両義性のシンボルであり、既存の宗教 (カトリック) だけでは癒しきれない心の隙間を埋めるべく要望された庶民信仰として、グアダルベ聖母への思慕とも通底するメスティーソの特徴をよく示している。
- 28) 表 2 を補足すると、1648 年はミゲル・サンチェス (*Imagen de la Virgen María, Madre de Dios de Guadalupe*)、1649 年はラッソ・デ・ラ・ベガ (*Huei tlamahuiçoltica*) のように、両者の著作発表年である。サンチェスに関しては、Brading 2001, pp. 54-75; ベガに関しては、Sousa 1998; Brading 2001, pp. 342-360 (*Nican mopohua*) を参照。
- 29) クラウセ 2004, 82 頁。メキシコ独立戦争の前夜、クリオーリョが独占する首都メキシコ・シティーのカビルド (市参事会) も一枚岩ではなかった。この動静は多くの場合、政治史の観点から分析されてきたが、背後にうごめく思想的な流れも考慮すべきだろう。Ohgaki 1970 を参照 (同書に関しては、大垣貴志郎氏の御教示をいただいた)。
- 30) ウェッジウッド 2003, 15 頁。ウェッジウッドが例証する薔薇十字団と 17 世紀における活動に関しては、イエイツ 1986 を参照。歴史上、社会不安に端を発し神秘主義が反復される事態は珍しくなく、ヴィクトル・ユゴーが健筆を振るった 19 世紀にも再び、降霊会が知識人のサークルで大きな関心を集めている。19 世紀のメキシコでは、サン・ルイス・ポトシの「交霊術師」イグ

- ナシオ・ラミーレスの書いたソネットがただちに思い浮かぶ。クラウセ 2004, 253-254 頁を参照。20 世紀初めまで余燼を残す, この不可解な風潮に関しては, 宗教的経験の諸相, とくに神秘主義の分析で有名なウィリアム・ジェイムズの評伝に詳しい。サイエンスライターによるノンフィクションであるが, 緊張と臨場感にあふれた著作として, プラム 2007 を推奨する。また古典的研究ながら, 中世民衆に脈々と息づく, 亡霊の社会史と死者のアレゴリーについては, 阿部 1989 が面白い。
- 31) 菊池 1995, 174 頁; アンダーソン 2007, 26 頁。山崎 2004, 17 頁によると, 国家への自己同一化はやがて個人の死を超越した永遠の生命という幻想を生み出し, 神話と歴史 (historia) が必要とされる。さらに, キャンベル, モイヤーズ 1992 を参照。
 - 32) 「国民国家」あるいは「国民統合」に関しては, 川崎 2010 だけでなく, アンダーソン 2007 および山崎 2004, 9-26 頁も参照。これらは, ナショナリズム研究と密接に関連する。
 - 33) ミエルの説教と彼の生涯に関しては, 山崎 2004, 95-118 頁を参照。
 - 34) メキシコ人にとって, ただの心外な話だろうが, 英雄にして敗者という両義性をもつ人物の代表がナポレオン (1769-1821 年; 在位 1804-1814, 15 年) であることは言を俟たない。彼の死をめぐるシャトーブリアンの嘆息は, ワーテルローの瓦解 (1815 年) をへて, 配流の果てにセント・ヘレナ島で世界した後の〈ナポレオン神話〉の生成をうまく表現している。デュフレス 2004, 170 頁を参照。
 - 35) 旧約聖書の預言者に関しては, 石田友雄 1980, 80-84 頁, 92-99 頁を参照。
 - 36) モレーロスの全体像とその評価に関しては, クラウセ 2004, 69-96 頁が明快である。
 - 37) 若桑 1995, 246-249 頁。
 - 38) Oded 1992; Sa-Moon 1989 を参照。
 - 39) Nin.A, I : 74-76 は, 次のように記す。「戦争と戦闘の女主人であるイシュタルは, 祭司たる私の心根を愛して, 私の側に立ち, 彼らの弓を破った。そして, 彼らの隊列を滅ぼしたのだ」。アッシリア人は, イシュタルに「性愛と戦いの女神」という呼称を与えた。ビエンコウスキ, ミラード 2004, 55-56 頁。
 - 40) 紀元前 805 年に敢行された, アルパド遠征を報告するバザルチック碑文の序文 (1-10 行) は, RIMA 3, A.0.104.3 から引用する。さらに, Donbaz 1990 を参照。アッシリアの女王に関しては, Parpola 1988 の語彙的研究が有益であろう。アッシリアの王母 (女王) サムラマトと同定される, セミラミスの伝説に関しては, ビエンコウスキ, ミラードがまとめているが, アルメニアの伝承によると, 彼女はアルメニアに大遠征を行ない, ヴァン市を建設した。この女王の名前は長い間, 中近東全域で非常によく知られていた。ビエンコウスキ, ミラード 2004, 312 頁。また, セミラミスと彼女の母たる女神デルケトーに関しては, Weinfeld 1991 を参照。
 - 41) シャルマネセル 3 世の西方遠征は, Yamada 2000 において仔細に議論される。さらに, Ikeda 2003 を参照。
 - 42) 古畑 2005a を参照。女王が野戦部隊を陣頭指揮したと推測される記事はアッシリア史にも出現するが, それは異邦の民, 古代アラブ人の女王アディヤの場合である (Weidner, *AfO* [1932-1933], nos. 79-82). Eph'al 1984, pp. 151-153 を参照。また, フランスの作家アンリ・トロワイヤが描いたように, イヴァン四世 (在位 1533-1584 年) の少年時代 (8 歳まで) に後見職を務めたエレナ・グリンスカヤは, ロシア史上でも名高い女傑の一人である。トロワイヤ 2002, 7-19 頁を参照。J・J・バッハオーフェン『母権論』(1816 年) を起点とする旧約女性論としては, 鈴木 1993 が基本的である。さらに, Arbeli 1984 を参照。旧約聖書において, ユダ王国末期, 王母は「グヴィーラー」という称号を保持し, 王の即位後は特別の荣誉を宮廷で捧げられた。Ishida 1977, pp. 155-157 を参照。

- 43) CAD K, pp. 437–438 頁を参照。
- 44) CTN III, pp. 32–33 他を参照。1121 年、ビザンツ（東ローマ）皇帝ヨハネス二世コムネノス（在位 1118–1143 年）はベチエネグ人迎撃のため、戦線が膠着状況に陥りかけたとき、歴代皇帝が常に戦場に伴っていた「聖母のイコン」に祈りを捧げ、ヴァリヤグ人近衛軍団に出撃を命じた。戦勝後、ヴァリヤグ人によって、コンスタンティノープルに聖オーラフ教会（ヴァリヤグ人の「聖母教会」）が建立された事績を、ビザンツ帝国史料に見出せるという。根津 1999, 172–174 頁を参照。
- 45) ゴールズワーシー 2005, 104 頁。
- 46) 『ヒストリア・アウグスタ (*Historia Augusta*)』の該当箇所に関しては、スバルティアヌス 2006, 136–138 頁を参照。
- 47) この問題に関しては広範な先行研究があるが、ここでは Ishida 1999, pp. 37–56 を挙げる。
- 48) 「デボラの歌」に関しては、Ikeda 1979 を参照。加えて、SAA 3, no.3: Obv.8–12 は「わたしはアッシュールバニパル、…ニネヴェ（＝イシュタル）の産んだ者」、SAA 3, no.3: Rev.14–15 は「ニネヴェの女主人（＝イシュタル）は、わたし（＝アッシュールバニパル）を産んだ母であり、わたしに比類なき王権を授けた」と述べる。SAA 3, no.3 は、「ニネヴェとアルベラのイシュタルに対するアッシュールバニパル王の賛歌」と題された文書である。
- 49) ボウディッカの反乱の経緯に関しては、同時代史料のタキトゥス『年代記』第 14 巻に基づき、南川 2003, 111–114 頁が要領よく整理している。さらに、ゴールズワーシー 2005, 52–53 頁を参照。
- 50) 南川 2003, 34–36 頁, 117–118 頁。今日、ボウディッカは、英語で「ボアディシア（Boadicea）」と呼ばれ、アイルランドの歌手エンヤの楽曲にも、その記憶が留められていることを付言したい。
- 51) 原典は *Biblia Hebraica Stuttgartensia*。翻訳は新共同訳に基づくが、必要に応じて修正した。
- 52) 新共同訳：「つまり、神はイエスを復活させて、わたしたち子孫のためにその約束を果たしてくださったのです。それは詩編の第二編にも、『あなたはわたしの子、わたしは今日あなたを産んだ』と書いてあるとおりです」。De Sandt 1994 を参照。
- 53) 「アッカド語預言」文学に関しては、月本 1997 を参照。これが変容した結果、類縁性を示す「黙示文学」が後代に発展したと考えられる（同論文 55–60 頁）。
- 54) 詩編 2 編の文脈が K2401（キンメリア人とエリピの地を火にかけた物語）に類似していることは注目に値する。4Q246 に関しては、Fitzmyer 1993；Peuch 1994 を参照。本稿は仮説であるが、詩編 2 編 7 節に基づいて、4Q246, Col. 1：7 の欠落部分を「（偉大な神によって、一人の子が産まれ、そして、彼は）…」(*l rb ywlyd br whw*) と復元する可能性を提案したい。
- 55) 辛承姫（シンスンヒ）2009 の他、上掲の注 9 を参照。
- 56) 混沌の時代に関しては、山田 1997, 9–10 頁の描写が刺激的である。
- 57) Anderson, Sánchez 2009 を参照。さらに、ボルヘス 2001, 7–126 頁を通して、ラテンアメリカに生きる人々の「永遠 (eternidad)」に対する想いを追体験することができる。それは、ヴィクトル・ユゴー『ノートルダム・ド・パリ』に醸し出される、限りなく儂いエスメラルダの雰囲気と一脈通じるものがある。
- 58) 本稿では、前史–本史–後史という三層構造（前後の連続性）を仮定している。この種の構成に関しては、佐藤 2003 が典型的である。前史たる「胎動期」の意味に関しては、古畑 2009, 16 頁, 注 39 を参照。
- 59) 国民国家的現象としての社会の軍事化、民衆の軍事化に関しては、阪口、丸島 2009, 280–287 頁を参照。
- 60) 大垣 2001, 9 頁。これらは、メキシコ的時間 (*tiempo mexicano*) の観念から派生した二つの要

素であろう。

参考文献

アウレリウス, マルクス

1998 『自省録』(西洋古典叢書, 水地宗明訳), 京都大学学術出版会。

会田雄次, 中村賢二郎

1989 『ルネサンス』(世界の歴史12), 河出文庫。

阿部謹也

1985 『歴史と叙述—社会史への道』, 人文書院。

1989 『西洋中世の罪と罰—亡霊の社会史』(叢書・死の文化1), 弘文堂。

1993 『中世の窓から』, 朝日選書(原著:朝日新聞社, 1981年)。

荒井献

2009 『初期キリスト教の霊性—宣教・女性・異端』, 岩波書店。

アンダーソン, ベネディクト

2007 『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』(白石隆, 白石さや訳), 書籍工房早山。

飯田洋介

2010 『書評: 阪口修平, 丸島宏太編『軍隊』(ミネルヴァ書房, 2009年)], 『史学雑誌』119-10, 110-112頁。

イエイツ, フランセス

1986 『薔薇十字の覚醒—隠されたヨーロッパ精神史』(山下和夫訳), 工作舎。

池上俊一

1992 『魔女と聖女—ヨーロッパ中・近世の女たち』, 講談社現代新書。

石田英一郎

2007 『新訂版 桃太郎の母—ある文化史的研究』, 講談社学術文庫。

石田友雄

1980 『ユダヤ教史』(世界宗教史叢書4), 山川出版社。

ウェッジウッド, C・ヴェロニカ

2003 『ドイツ三十年戦争』(瀬原義生訳), 刀水書房。

ウォーマック, Jr., ジョン

1970 『サバタとメキシコ革命』(向後英一訳), 早川書房。

エリアーデ, ミルチャ

1978 『豊饒と再生—宗教学概論2』(久米博訳, 堀一郎監修), せりか書房。

大垣貴志郎

2001 「メキシコの百年—独立から革命までの軌跡—」, 『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.1, 1-12頁。

2008 『物語—メキシコの歴史—太陽の国の英傑たち』, 中公新書。

片倉充造

2009 「書評: 加藤隆浩編『ラテンアメリカの民衆文化』(行路社, 2009年)」, 『アメリカス研究』14, 99-102頁。

川崎亜紀子

2010 「書評: 中本真生子著『アルザスと国民国家』(晃洋書房, 2008年)」, 『史学雑誌』119-8, 98-106頁。

神田千里

2005 『島原の乱—キリシタン信仰と武装蜂起』, 中公新書。

菊池良生

2007 『戦うハプスブルク家—近代の序章としての三十年戦争』, 講談社現代新書。

キャンベル, ジョーゼフ, ビル・モイヤーズ

1992 『神話の力』(飛田茂雄訳), 早川書房。

国本伊代

2009 『メキシコ革命とカトリック教会—近代国家形成過程における国家と宗教の対立と宥和』, 中央大学出版部。

クラウセ, エンリケ

2004 『メキシコの百年—1810-1910—権力者の列伝』(大垣貴志郎訳), 現代企画室。

桑原武夫編

1975 『フランス革命とナポレオン』(世界の歴史10), 中公文庫。

古畑正富

2005a 「新アッシリア帝国の男系系図と王母—バザルチック碑文の王母サムラマトは女戦士であったか」, 『桃山学院大学キリスト教論集』41, 69-91頁。

2005b 「書評: エンリケ・クラウセ『メキシコの百年—1810-1910—権力者の列伝』(大垣貴志郎訳, 現代企画室, 2004年)」, 『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.5, 125-134頁。

2008 「オクタビオ・パスの作品に見るメキシコ民衆の心性—『孤独の迷宮』をめぐる問題を踏まえて—」, 『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.8, 23-38頁。

2009 「旅人の物語と反復される『故郷喪失者』のイメージ—パラレルワールドの『スペイン人』

に関する二つの事例一』、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.9, 7-20頁。

ゴールズワーシー, エイドリアン

2005 『古代ローマ軍団大百科』(池田裕, 古畑正富, 池田太郎訳), 東洋書林。

阪口修平, 丸島宏太編

2009 『軍隊』(近代ヨーロッパの探究⑫), ミネルヴァ書房。

佐藤賢一

2003 『英仏百年戦争』, 集英社新書。

2008 『革命のライオン』(小説フランス革命I), 集英社。

2010 『フランス革命の肖像』, 集英社新書ヴィジュアル版。

辛承姫(シンスンヒ)

2009 『遠藤周作論—母なるイエス』, 専修大学出版局。

鈴木佳秀

1993 『旧約聖書の女性たち』, 教文館。

スパルティアヌス, アエリウス他

2006 『ローマ皇帝群像2』(桑山由文, 井上文則, 南川高志訳), 京都大学学術出版会。

セプールベダ, フワン・ヒネース・デ

1992 『征服戦争は是か非か』(アンソロジー新世界の挑戦7, 染田秀藤訳), 岩波書店。

高山一彦編訳

2002 『ジャンヌ・ダルク処刑裁判(新装版)』, 白水社。

タキトゥス

1981 『年代記—ティベリウス帝からネロ帝へ(上・下)』(國原吉之助訳), 岩波文庫。

月本昭男

1997 「古代メソポタミアにおける預言と預言文学」, 『古代イスラエル預言者の思想的世界』, 金井美彦, 月本昭男, 山我哲雄編, 43-64頁, 新教出版社。

辻本論

2010 「王政復古期イングランドにおける都市・城砦守備隊」, 『史学雑誌』119-11, 1-36頁。

デュフレス, ロジェ

2004 『ナポレオンの生涯』(文庫クセジュ, 安達正勝訳), 白水社。

トロワイヤ, アンリ

2002 『イヴァン雷帝(改版)』(工藤庸子訳), 中公文庫。

内藤道雄

2000 『聖母マリアの系譜』, 八坂書房。

中川文雄, 松下洋, 遅野井茂雄

1985 『ラテンアメリカ現代史Ⅱ—アンデス・ラブラタ地域』(世界現代史 34), 山川出版社。

永原慶二

1974 『下剋上の時代』(日本の歴史 10), 中公文庫。

西澤龍生編

1992 『近世軍事史の震央—人民の武装と皇帝凱旋』, 彩流社。

根津由喜雄

1999 『ビザンツ—幻影の世界帝国』, 講談社選書メチエ。

長谷川修一

2010 「列王記の歴史叙述とその史料価値—編集史的観点から見た『イエフ物語』成立の歴史的背景—」, 『史境』 61, 57-70 頁。

バルト, ロラン

1971 『零度のエクリチュール』(渡辺淳, 沢村昂一訳), みすず書房。

ビエンコウスキ, ピョートル, アラン・ミラード

2004 『大英博物館版 図説古代オリエント事典』(池田裕・山田重郎監訳), 東洋書林。

フエンテス, カルロス

1996 『埋められた鏡—スペイン系アメリカの文化と歴史』(古賀林幸訳), 中央公論社。

ブラム, デボラ

2007 『幽霊を捕まえようとした科学者たち (原題: *Ghost Hunters*)』(鈴木恵訳), 文藝春秋。

プリニウス

1999 『プリニウス書簡集—ローマ帝国—貴紳の生活と信条』(國原吉之助訳), 講談社学術文庫。

ボルヘス, ホルヘ・ルイス

2001 『永遠の歴史』(土岐恒二訳), ちくま学芸文庫。

松方冬子

2010 『オランダ風説書—「鎖国」日本に語られた「世界」』, 中公新書。

松田智雄 (責任編集)

1969 『ルター』(世界の名著 18), 中央公論社。

松原秀一

2001 『異教としてのキリスト教』, 平凡社ライブラリー。

松森奈津子

2009 『野蛮から秩序へ—インディアス問題とサラマンカ学派』, 名古屋大学出版会。

南川高志

2003 『海のかなたのローマ帝国—古代ローマとブリテン島』, 岩波書店。

宮本袈裟雄

2003 「庶民信仰と現世利益」, 『史境』46, 1-10頁。

ムージル, ロベルト

1978 『愛の完成』(古井由吉訳), 『リルケ・ムージル集』(世界文学全集49), 筑摩書房, 269-314頁。

山崎眞次

2004 『メキシコ 民族の誇りと闘い—多民族共存社会のナショナリズム形成史』, 新評論。

山田風太郎

1997 『明治断頭台』(山田風太郎明治小説全集7), ちくま文庫。

ラス・カサス, バルトロメー・デ

1976 『インディアスの破壊についての簡潔な報告』(染田秀藤訳), 岩波文庫。

ル・ジャン, レジーヌ

2009 『メロヴィング朝』(文庫クセジュ, 加納修訳), 白水社。

若桑みどり

1995 『戦争がつくる女性像—第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』, 筑摩書房。

ADD = Johns, C.H.W., *Assyrian Deeds and Documents*, 4 Vols., Cambridge, 1898 - 1923.

Anderson, C.A. and E.C. Sánchez

2009 *Our Lady of Guadalupe: Mother of the Civilization of Love*, Doubleday, New York.

Arbeli, S.

1984 *Women in the Bible in Position and Their Involvement in Social and Political Affairs: A Comparative Study Using Ancient Near Eastern Sources*, Ph.D. dissertation, Hebrew University of Jerusalem, Jerusalem. (Hebrew).

Brading, D.A.

2001 *Mexican Phoenix: Our Lady of Guadalupe: Image and Tradition across Five Centuries*, Cambridge University Press, Cambridge.

CAD = *The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*, Chicago, 1956 – .

CTN = Cuneiform Texts from Nimrud.

De Sandt, H. van

1994 “The Quotations in Acts 13, 32 – 52 as a Reflection of Luke’s LXX Interpretation”, *Biblica* 75, pp. 30 – 33.

Donbaz, V.

1990 “Two Neo-Assyrian Stelae in the Antakya and Kahramanmaraş Museums”, *Annual Review of the Royal Inscriptions of Mesopotamia Project* 8, pp. 5 – 21.

Eph’al, I.

1984 *The Ancient Arabs: Nomads on the Borders of the Fertile Crescent 9th – 5th Centuries B.C.*, Magnes Press, Jerusalem.

Fitzmyer, J.A.

1993 “4Q246: The 〈Son of God〉 Document from Qumran”, *Biblica* 74, pp. 153 – 174.

Hamill, H.

1970 *The Hidalgo Revolt*, University of Florida Press, Gainesville.

Ikeda, Y.

1979 “The Song of Deborah and the Tribes of Israel”, *Studies in the Bible and the Hebrew Language Offered to Meir Wallenstein on the Occasion of His Seventy-fifth Birthday*, C. Rabin, et al. (eds.), pp. 65 – 79, Jerusalem. (Hebrew).

2003 “〈They Divided the Orontes River Between Them〉 : Arpad and Its Borders with Hamath and Patin/Unki in the Eighth Century BCE”, *Eretz-Israel* 27 (Hayim and Miriam Tadmor Volume), pp. 91* – 99*.

Ishida, T.

1977 *The Royal Dynasties in Ancient Israel: A Study on the Formation and Development of Royal-Dynastic Ideology* (BZAW 142), Walter de Gruyter, Berlin/New York.

1999 *History and Historical Writing in Ancient Israel: Studies in Biblical Historiography* (Studies in the History and Culture of the Ancient Near East 16), Brill, Leiden/Boston/Köln.

K = tablets in the Kouyunjik collection of the British Museum.

Katz, F. (ed.)

1988 *Riot, Rebellion, and Revolution: Rural Social Conflict in Mexico*, Princeton University Press, Princeton, N.J.

Oded, B.

1992 *War, Peace and Empire: Justifications for War in Assyrian Royal Inscriptions*, Dr. Ludwig Reichert, Wiesbaden.

Ohgaki, K.

1970 *El cabildo de la ciudad de México durante la guerra de independencia*, Ph.D. dissertation, El Colegio de México, México, D.F.

Parpola, S.

1988 “The Neo-Assyrian Word 〈Queen〉”, *SAAB* II /2, pp. 73 – 76.

Peuch, É.

1994 “Notes sur le fragment d’apocalypse 4Q246: 〈Le fils de dieu〉”, *RB* 101, pp. 538 – 558.

RIMA 3 = Grayson, A.K., *Assyrian Rulers of the Early First Millennium BC II (858 – 745 BC)*, University of Toronto Press, Toronto, 1996.

SAA 3 = Livingstone, A., *Court Poetry and Literary Miscellanea*, Helsinki University Press, Helsinki, 1989.

SAA 7 = Fales, F.M. and J.N. Postgate, *Imperial Administrative Records, Part I: Palace and Temple Administration*, Helsinki University Press, Helsinki, 1992.

Sa-Moon, K.

1989 *Divine War in the Old Testament and in the Ancient Near East* (BZAW 177), Walter de Gruyter, Berlin/New York.

Sousa, L., et al. (eds.)

1998 *The Story of Guadalupe: Luis Laso De LA Vega’s ‘Huei tlamahuiçoltica’ of 1649*, Stanford University Press, Palo Alto.

Weinfeld, M.

1991 “Semiramis: Her Name and her Origin”, *Ah, Assyria ...: Studies in Assyrian History and Ancient Near Eastern Historiography Presented to Hayim Tadmor* (Scripta Hierosolymitana 33), Cogan, M. and I. Eph’al (eds.), pp. 99 – 103, Magnes Press, Jerusalem.

Yamada, S.

2000 *The Construction of the Assyrian Empire: A Historical Study of the Inscriptions of Shalmaneser III (859 – 824 B.C.) Relating to His Campaigns to the West* (Culture and History of the Ancient Near East 3), Brill, Leiden/Boston/Köln.